

日本古代通史・連載第 18 回

邪馬台国の時代⑬
～投馬国は豊の国～

河村哲夫

【これまで季刊「古代史ネット」に連載された河村哲夫氏の論文】

季刊「古代史ネット」	日本古代通史・連載回数	テーマ
創刊号(2020年12月)	第1回【プロローグ】	【I】卑弥呼の鏡【II】天照大神の鏡
第2号(2021年3月)	第2回【奴国の時代①】	【I】邪馬台国前史としての奴国 【II】高天原の神々
第3号(2021年6月)	第3回【奴国の時代②】	朝鮮半島南部の倭人の痕跡
	第4回【奴国の時代③】	北部九州のケニグニ
第4号(2021年9月)	第5回【奴国の時代④】	奴国の神々
第5号(2021年12月)	第6回【邪馬台国の時代①】	卑弥呼の登場
第6号(2022年3月)	第7回【邪馬台国の時代②】	卑弥呼の外交①
第7号(2022年6月)	第8回【邪馬台国の時代③】	卑弥呼の外交②
第8号(2022年9月)	第9回【邪馬台国の時代④】	邪馬台国への道・三韓諸国
	第10回【邪馬台国の時代⑤】	邪馬台国への道・対馬と壱岐
第9号(2022年12月)	第11回【邪馬台国の時代⑥】	末盧国と西海の島々
	第12回【邪馬台国の時代⑦】	末盧国から伊都国へ
第10号(2023年3月)	第13回【邪馬台国の時代⑧】	伊都国から奴国へ
第11号(2023年6月)	第14回【邪馬台国の時代⑨】	奴国から不弥呼へ
	第15回【邪馬台国の時代⑩】	夜須をゆく
	第16回【邪馬台国の時代⑪】	朝倉をゆく
	第17回【邪馬台国の時代⑫】	日田をゆく
第12号(2023年9月) 4論文一挙掲載！	第18回【邪馬台国の時代⑬】	投馬国は豊の国
	第19回【邪馬台国の時代⑭】	狗奴国は肥の国
	第20回【邪馬台国の時代⑮】	狗奴国と卑弥呼の死
	第21回【邪馬台国の時代⑯】	卑弥呼と台与

南水行 20 日

次に、投馬国について述べよう。

『魏志倭人伝』には、「南して投馬国に至る。水行すること二十日なり。官を弥弥(みみ)と曰(い)い、副を弥弥那利(みみなり)と曰(い)う、五万余戸可(ばかり)と書かれている。

この投馬国に関して、本丸ともいえる邪馬台国が乱立していることもあって、もはや定説といえる説はないといっている状態である。

もちろん、九州説においてもバラバラである。

- (1) 日向国児湯郡都万(つま)説【日向国一の宮の都万神社(宮崎県西都市妻)】あたりとする説(本居宣長など)
- (2) 上妻郡・下妻郡・三瀨郡の「ツマ」説(太田亮)
- (3) 日田郡五馬説(大分県)
- (4) 玉名市説(熊本県)

(5) 薩摩国説(吉田東伍)

投馬は殺馬あるいは設馬の誤りで、「サツマ」すなわち「薩摩」である。

近畿説によれば、

- (1) 玉祖郷説(山口県防府市)(内藤湖南)
- (2) 鞆説(広島県福山市)(三宅米吉・志田不動齋)
- (3) 出雲説(島根県)
- (4) 丹後説(京都府)
- (5) 但馬説(兵庫県)
- (6) 須磨(兵庫県)
- (7) 岡山市説 (岡山県)
- (8) 玉野市玉 (岡山県)

などがあるが、いちいち論評することも煩わしく、時間の浪費である。

「名前=name」のように、たまたま似ているものを探せばいくらでも出てくる。

「山田=邪馬台」とするならば、全国至る所に邪馬台国が出現するであろう。多くの山田さんも邪馬台国の末裔ということになる。

ただし、上妻郡・下妻郡・三瀨郡の「ツマ」を投馬とする太田亮氏の説についてのみ、一言論評させていただきたい。筆者は三瀨郡生まれで、上妻郡・下妻郡も近隣地域であるからである。

そもそも、上妻(かみつま)は「上(かみつ)八女」、下妻(しもつま)は「下(しもつ)八女」のことで、矢部川の上流域と下流域という意味である。もちろん矢部=八女のことである。鼻が詰まれば、「やべ」も「やめ」になる。

ところが、713(和銅6)年のいわゆる「好字二文字化令」によって、漢字二文字で地名を表記することとなった。このとき「上八女」を「上妻」、「下八女」を「下妻」に改めたとみられる。平安時代の『和名抄』でも上妻郡、下妻郡とされている。

「上八女」「下八女」を二文字の漢字に変換するのは、現代でもかなりの難問である。

当時の役人たちも四苦八苦したであろう。試行錯誤を重ねて、ついに「かみつ・やめ」を「かみ・つやめ」と区切り、「つやめ」を「妻(つま)」という漢字に充てる奇策でもって打開した。

助詞の「つ」を先頭にして、「妻」という漢字を充てるなど、へぼ将棋のようなめちゃくちゃな一手ではあったが、どうにか現在まで継承され、「つ」が助詞であったことすらも忘れ去られてしまった。

奈良出身の太田亮氏がまちがえられたのも無理はない。

いずれにしろ、邪馬台国時代の投馬(ツマ)とはまったく無関係である。

また、三瀨(みずま)についても、筑後川下流の湿地帯をあらわす水沼(みぬま・みずぬま)に由来するもので、これまた投馬(ツマ)とはまったく関係ない。

立命館大学教授であった太田亮氏(1884~1956)は氏族制度の研究をはじめ優れた業績を残された方ではあるが、この件に関しては残念ながら落第点である。

それはともかく、筆者としては、すでに述べたとおり、水行については、帯方郡から投馬国まで海路 20 日と解している。

	帯方郡	狗邪韓国	末盧国	伊都国	奴国	不弥国	到着地	所要日数
水行	→						邪馬台国	10 日
	→			→			投馬国	20 日

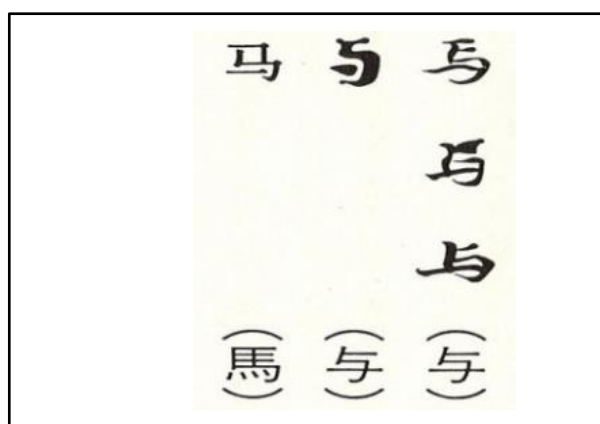
よって、末盧国から投馬国までは 10 日の距離ということになり、投馬国＝投与国＝豊の国とみている。

すなわち、投馬国は投与国の書き間違いと考えている。

陳寿が書き記した草書体の原稿を、担当役人らが書き写すときにエラーが生じたのであろう。

『魏志倭人伝』とて、絶対ではない。

投馬国＝投与国＝豊の国(豊前・豊後)



弥弥と弥弥那利

投馬国には、長官として弥弥(みみ) (耳)、次官として弥弥那利(みみなり) (耳成、耳垂)が配属されている。配属したのは、もちろん邪馬台国の卑弥呼である。投馬国もまた邪馬台国の統治下にあった。

邪馬台国の卑弥呼が配属した各国の長官・次官は以下の表のとおりである。

伊都国の長官の爾支(にき)について、かつて火と関係しているのでないかと指摘したが、いまだ不弥国の長官の多模(たま・玉)とおなじく、瓊(に・玉)に関連しているのではないかという気持ちが強くなってきている。

邪馬台国については、一応下記のとおり注釈しているが、まったく自信がない。長官が一人なのか複数なのかすらわからない。担当分野・所掌事務についても、まったく不明である。

情報不足のため、ほとんどギブアップといっている状態である。

国名	長官	魏志倭人伝	意味	注 釈
	次官			
対馬・壹岐	長官	卑狗(ひこ)	日子=彦	太陽祭祀か
	次官	卑奴母離(ひなもり)	日守(夷守は×)	太陽祭祀か
伊都	長官	爾支(にぎ)	火あるいは瓊(玉)か	瓊瓊杵尊(ニニギ)・邇芸速日命(ニギハヤヒ)と関連か
	次官	泄謨觚(しまこ)	島日子(彦)か	志摩側の太陽祭祀か
		柄渠觚(へここ)	彦(日子)子か	太陽祭祀か
奴	長官	咒馬觚(しまこ)	島日子(彦)か	島々の太陽祭祀か
	次官	卑奴母離	日守	太陽祭祀か
不弥国	長官	多模(たま)	魂、玉	玉石信仰か
	次官	卑奴母離	日守	太陽祭祀か
投馬国	長官	弥弥(みみ)	耳	天照大神の長男の天忍穗耳命と関連か
	次官	弥弥那利(なり、たり)	耳成、耳垂	耳に飾る玉石に由来か
邪馬台国	長官 次官	伊支馬(いきま)	活目(いきま)	天照大神の四男に活目津彦根命(活津彦根命)がいる
		弥馬升(みましよう)	御体処(みまと)	血縁的重臣か
		弥馬獲支(みまわき)	御体傍(みまわき)	血縁的重臣か
		奴佳鞮(なかて)	中臣(なかとみ) あるいは糠戸(ぬかど)か	天の糠戸神(鏡作部の伊斯許理度売命の父)か

なお、投馬国の弥弥(耳)あるいは弥弥那利(耳成、耳垂)については、『肥前国風土記』や『日本書紀』の記事が参考になろう。

すでに述べたように、『肥前国風土記』には、景行天皇の時代に「大耳」「垂耳」などと名乗る豪族が九州西方の五島列島にいたことが記され、『日本書紀』景行天皇紀には、豊前の宇佐の川上に「鼻垂(はなたり)」、御木の川上(山国川)に「耳垂」と名乗る豪族がいたことが記されている。

邪馬台国時代に由来する弥弥(耳)あるいは弥弥那利(耳成・耳垂)が、景行天皇時代まで残存していたことをしめすものであろう。

さらにいえば、筑後国一の宮の高良大社の祭神は玉垂命とされている。大善寺玉垂宮(久留米市)・風浪宮(大川市)の祭神でもあるから、筑後川下流域の守護神として祭られているのは確かであろうが、玉垂命に関する情報がほとんど伝わっていないこともあり、諸説紛々といった状態である。

しかしながら、『魏志倭人伝』に基づき、

「多模(たま) + 那利(成、垂) = 玉垂」

とみれば、玉垂命は卑弥呼が筑後地方に配置した長官であった可能性が高くなる。

『魏志倭人伝』	投馬(投与=豊)国	弥弥(耳) 弥弥那利 (耳成・耳垂)	卑弥呼の時代 (2~3世紀)
『日本書紀』	宇佐の川上(豊前)	鼻垂	景行天皇の時代 (4世紀後半)
	御木の川上(豊前・山国川)	耳垂	
『肥前国風土記』	大家嶋【的(山)あずち大島】	大身(臣)	景行天皇の時代 (4世紀後半)
	小近(小値賀) 【上五島(中通島・若松島)・宇久島 ・小値嘉島】	大耳	
	大近(大値賀) 【下五島(福江島・久賀島・奈留島)】	垂耳	
高良大社縁起	高良大社(久留米市) 大善寺玉垂宮(久留米市) 風浪宮(大川市)	玉垂命	玉(多模)と垂

邪馬台国は北部九州の勢力

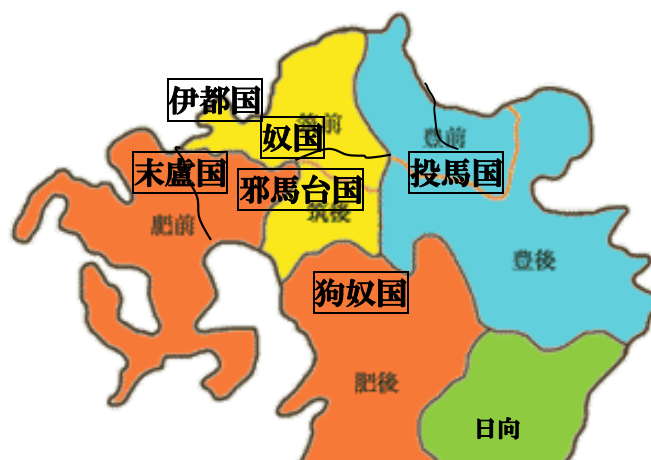
筑紫平野を拠点に卑弥呼が支配していたのは、対馬・壱岐・伊都(怡土)・奴(那珂)・不弥(宇美)など、北部九州に位置するクニグニであった。

卑弥呼が豊前・豊後を見落とすはずはない。投馬国を投与国=豊の国とみれば、北部九州のピースがほぼ揃うことになる。

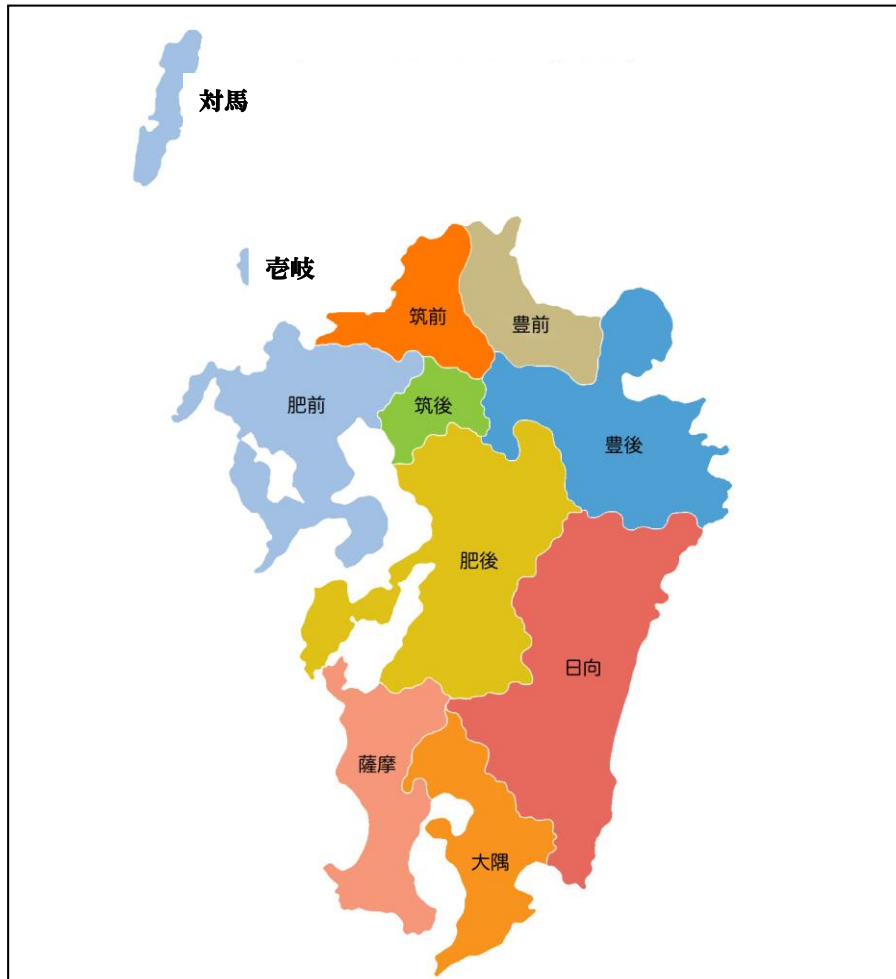
邪馬台国と対立していた狗奴国については、地図でも、筑後地方の南部に位置する肥後が最有力候補であることは一目瞭然である。狗奴国=熊の国である。

東九州側でいえば、豊後の南に日向が位置しているが、これは北部九州勢力の南下(いわゆるニニギノミコトの天孫降臨)によって、邪馬台国に新たに吸収された地域であり、それ以前は薩摩・大隅とおなじく、隼人が支配する地域であった。

したがって、隼人が支配していた薩摩を邪馬台国傘下の投馬国とみる吉田東伍の説は、この点からも妥当でないということになる。



邪馬台国	7万戸
奴国	2万戸
投馬国	5万戸



九州について

なお、『古事記』は、九州——すなわち、筑紫島について次のように記す。

「筑紫島(つくしのしま)は胴体が1つで、面(おも)が4つある」

国名	『古事記』 真福寺本	『古事記』 伊勢本・道果本	『古事記』加茂本 『先代旧事本紀』
筑紫国	白日別(しらひわけ)	① 白日別	白日別
豊国	豊日別(とよひわけ)	② 豊日別	豊日別
肥国	建日向日豊久土比泥別 (たけひむかひとよくじ ひねわけ)	③ 建日別	建日別
熊曾国	建日別(たけひわけ)		熊襲国
日向国		④ 豊久土比泥別	豊久土比泥別
評価	建日別=熊曾国は肥国の誤りの可能性が高い。肥国の豊久土比泥別は日向との混同か。×	日向国が豊国から分離したのは景行天皇(370~385)以降か。 ◎	「面(おも)四つ」とする『古事記』の記述に合わない。×

北部九州の筑紫国と豊国が邪馬台国のエリア、肥国が狗奴国＝熊襲のエリア、日向国は北部九州勢力の南進(いわゆる天孫降臨)によって後の時代に編入されたエリアとみればわかりやすい。

隼人が支配していた大隅・薩摩については、4世紀後半ごろとみられる景行天皇の武力討伐や5世紀前半の応神天皇・仁徳天皇による妃の招聘などの宥和策を経て、大和朝廷の行政区画として正式に認定されたのは8世紀以降のことである。

4か国から9か国(九州)へ

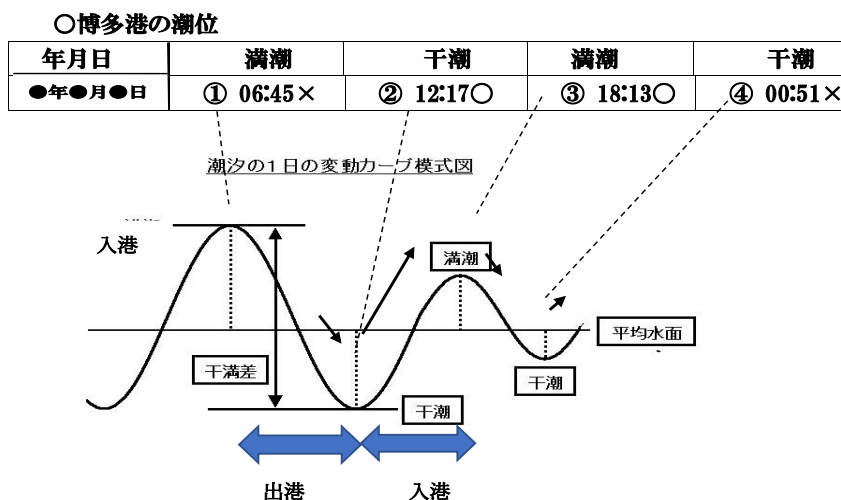
当初	7世紀末	8世紀初頭	奈良時代	備考
① 筑紫	①筑前	①筑前	①筑前	『続日本紀』文武天皇 2(698)年 3月筑前国が登場
	②筑後	②筑後	②筑後	
② 豊	③豊前	③豊前	③豊前	文武天皇 2(698)年 9月豊前国が登場
	④豊後	④豊後	④豊後	
③ 肥	⑤肥前	⑤肥前	⑤肥前	
	⑥肥後	⑥肥後	⑥肥後	
④日向	⑦日向	⑦日向	⑦日向	
大隅×	×	×	⑧大隅	713(和銅 6)年大隅国が建てられた。
薩摩×	×	⑧唱更 (はやひと)	⑨薩摩	702(大宝 2)年唱更国が建てられた。 702～709年に唱更国が薩摩国になった。
4か国	7か国	8か国	9か国	

帯方郡から投馬国まで水行 20 日

前述したとおり、帯方郡～末盧国まで船で10日、末盧国から投馬国まではさらに船で10日、計20日が帯方郡から投馬国までの水行日数である。

ただし、末盧国の呼子から九州東岸の豊の国(豊前・豊後)へ向かうには、沿岸航法で行かねばならない。沿岸航法の場合、満ち潮に乗って入港し、引き潮に乗って出港する必要がある。

下図は、某年某月某日の博多港の潮位の状況である。地球の自転と月の位置関係から、1日24時間のうち6時間ごとに満潮と干潮が2回訪れる。しかしながら、日中のチャンスは各1回しかない。当然のことながら、古代人は危険な夜間航海を避ける。



上の潮位図でいえば、1回目の満潮時刻 06:45 までに港に入ることは困難である。暗いうちに別の港を出港し、明け方近くに博多港に入港する必要があるからである。

しかし、06:45 から 12:17 までは引き潮である。午前中に博多港を出港して次の港へ向かえばいい。

そして、博多港は 12:17 から 18:13 まで満ち潮となる。午後から日没までに博多港に入ればいい。

このようにして沿岸部を進むと、次のようになる。

呼子→①唐津(末廬国)→②糸島(伊都国)→③博多(奴国)→④新宮→⑤宗像→⑥芦屋→
⑦洞海湾→⑧門司→⑨苅田(豊前)→⑩行橋(豊前)



呼子から豊前の行橋あたりまで、ほぼ 10 日の行程となる。

航海の日数からみても、投馬国=投与国=豊の国(豊前・豊後)という関係が成り立つ。

豊前国の領域(— は古代官道)



郡	平安時代(和名抄)		江戸時代		現在
	郷	郷数	所属	村数	
企救郡	長野・蒲生	2	小倉藩	110	福岡県
京都郡	諫山・本山・刈田・高来	4	小倉藩	71	福岡県
田川郡	香春・雉怡・位登・城田	4	小倉藩	64	福岡県
仲津郡	砦見・葛見・城井・狭度 高屋・中臣・仲津・高屋	8	小倉藩	76	福岡県 明治 29 京都郡に編入
築城郡	綾幡・桑田・嶋木・大野	4	小倉藩	41	福岡県
上毛郡	山田・炊江・多布・上身	4	小倉藩・中津 藩ほか	75	福岡県・大分県
下毛郡	山国・大家・麻生・野仲 諫山・穴石・小楠	7	中津藩ほか	98	大分県
宇佐郡	野麻・酒井・葛原・封戸 広山・垣田・高家・深見 辛島	9	中津藩ほか	241	大分県
8 郡		42		776	

豊後国の領域(— は古代官道)



郡	平安時代(和名抄)		江戸時代		現在
	郷	郷数	所属	村数	
日高郡	安伎・伊美・来縄・田染・津守・(日田・在田・夜開・日理・又連・石井)	11	幕府領・森藩	93	大分県
玖珠郡	今巳・小田・永野	3	幕府領・森藩	40	大分県
国崎郡	武蔵・来縄・国前・由染阿岐・津守・伊美	7	幕府領、杵築藩、延岡藩など	207	大分県
速見郡	朝見・八坂・田布・大神山香	5	幕府領、杵築藩、日出藩、森藩、延岡藩など	123	大分県
海部郡	佐加・穂門・佐井・丹生(日田・在田・夜開・日理父連・石井)	4	幕府領、臼杵藩、佐伯藩など	317	大分県
直入郡	朽網・三宅・直入・柏原	4	幕府領、岡藩、熊本藩	303	大分県
大野郡	田口・大野・緒方・三重	4	岡藩、臼杵藩	460	大分県
7郡		38		1,543	

※海部郡内の6郷は日高(田)郡内の郷が混入したものと解されている。

※日高(田)郡の__を付した5郷は国崎郡の郷が混入している可能性がある。

邪馬台国の拡張政策

何ゆえ、国家というのは貪欲に領土の拡張をめざすのか。

これはこれで永遠のテーマとして取り組むべき課題であろうが、邪馬台国もまた、そのような拡張政策にとりつかれていたようにおもえる。

次号で述べる狗奴国との戦いは、南方への進出を企てた邪馬台国に対する熊本——肥後方面からの猛烈な反動であった可能性が高い。

あるいは、『日本書紀』『古事記』などに記された、

- ① 出雲の国譲り
- ② ニギハヤヒの丹波進出
- ③ ニニギミコトの日向への天孫降臨
- ④ 日向の山幸彦と海幸彦の対立
- ⑤ ニギハヤヒの近畿進出

などもまた、北部九州勢力の対外的拡張政策を反映したものであったろう。

そのうち、④の山幸彦と海幸彦との対立は、北部九州勢力の拡張政策に反発した南部九州の隼人勢力との争いとみることできる。

そしてまた、①の出雲の国譲り、②のニギハヤヒの丹波進出、⑤のニギハヤヒの近畿進出——これらはいずれも、北部九州の勢力による列島制覇に向けた動きの一端であろう。

これらのことについては、この長い連載のなかで、順次述べていくこととしている。

邪馬台国の候補地についての判定基準

前述したように、『古事記』(伊勢本・道果本)によれば、筑紫島——すなわち九州の面(おも)が4つとは、①筑紫国(白日別) ②豊国(豊日別) ③肥国(建日別) ④日向国(豊久土比泥別)のことで、いわゆる天御中主命を祖とする高天原勢力は①の筑紫国を拠点として勃興した。

したがって、卑弥呼は筑紫国のいずれかの場所に宮殿を構え、『魏志倭人伝』に、

「王となりてより以来、見(けん)有る者少し。婢千人を以(もち)ひ、自ずから侍る。ただ、男子一人有りて、飲食を給し、辞を伝へ、居所に出入りす。宮室、楼観の城柵は厳く設け、常に人有りて、兵を持ち守衛す」

とあるとおり、卑弥呼は、女王即位後、人々から見られることを極力避け、侍女千人に囲まれて暮らしていた。

そして、卑弥呼の宮殿は物見やぐらや城柵などで厳しく守られ、常に兵が武装して警備していた。ただ一人の男性(弟の一人か)が卑弥呼の部屋に出入りし、卑弥呼に飲食を給し、辞を伝えた。卑弥呼はおそらく当時の風習に従って、左腕にイモガイの貝輪を装着していたにちがいない。偉くなるほど貝輪の数が多くなるから、右手にも装着していたかもしれない。食事など日常生活も不自由である。

卑弥呼に仕えた男性は、食事を運ぶだけではなく、両腕の不自由な卑弥呼のためにサジなどで直接飲食物を与えていたかもしれない。

卑弥呼に仕えた一人の男性というのは、卑弥呼と相当近い血縁者(たとえば弟など)であった可能性が高くなる。

また、「辞を伝えた」とあるから、政治的な諸問題について直接卑弥呼に具申してその判断を仰ぎ、その結果を重臣たちにも伝えることができた人物である。年若い少年には務まらない。かなりの能力と分別を有したそれなりの人物であったにちがいない。

それはともかくとして、『魏志倭人伝』の記事からみて、卑弥呼は一般庶民および重臣たちから隔絶された場所において侍女千人とともに居住していた。

問題は、この隔絶性をどうみるかである。

【1 説】一つの集落のなかの特別の区画内に居住している(集落内の隔絶性)。

【2 説】一般集落とは別の集落に居住している(一般集落との隔絶性)。

このいずれであろうか。

吉野ケ里遺跡の内郭

王ないし首長が「一つの集落のなかの特別の区画内に居住している」という「集落内の隔絶性」ということで想起されるのは、吉野ケ里遺跡の「北内郭」(2,750 m²)である。

北内郭は、吉野ケ里集落の最高権力者の居住区域および祭祀の場とみられている。

一般に次のように解説されている。

集落の重要拠点となっていた吉野ヶ里遺跡の北内郭

身分の高い人物が集まったり、重要な物事についての話し合ったり、時には祖先の霊からお告げを授かったりしていた場所と考えられています。主祭殿を中心に、高床住居・高床倉庫・物見櫓・周囲に張り巡らされた板壁などが復元されています。

主祭殿

主祭殿は吉野ヶ里のクニ全体の重要な事柄を決める会議を行ったり、祖先の霊への祈りや祀りを行ったりした、中心的な建物と考えられています。

柱の太さ・間隔から3層2層建ての高床建物となると考えられ、古代中国の建物に関する記録や民族(俗)例等から、中層と上層は異なる機能を持っていたと想像できます。

中層部分は政治の場と想定し、また、祭りの際には直会の場としても利用された物として、共同体にとっての重要な決定を行う際の支配層の集会を行う場としました。

上層部分は南北の主軸が一致する建物をもっとも祭祀性の高い場であったことが考えられるため、最高祭祀権者が祖霊に安寧と豊饒の祈りをささげる場として復元しました。



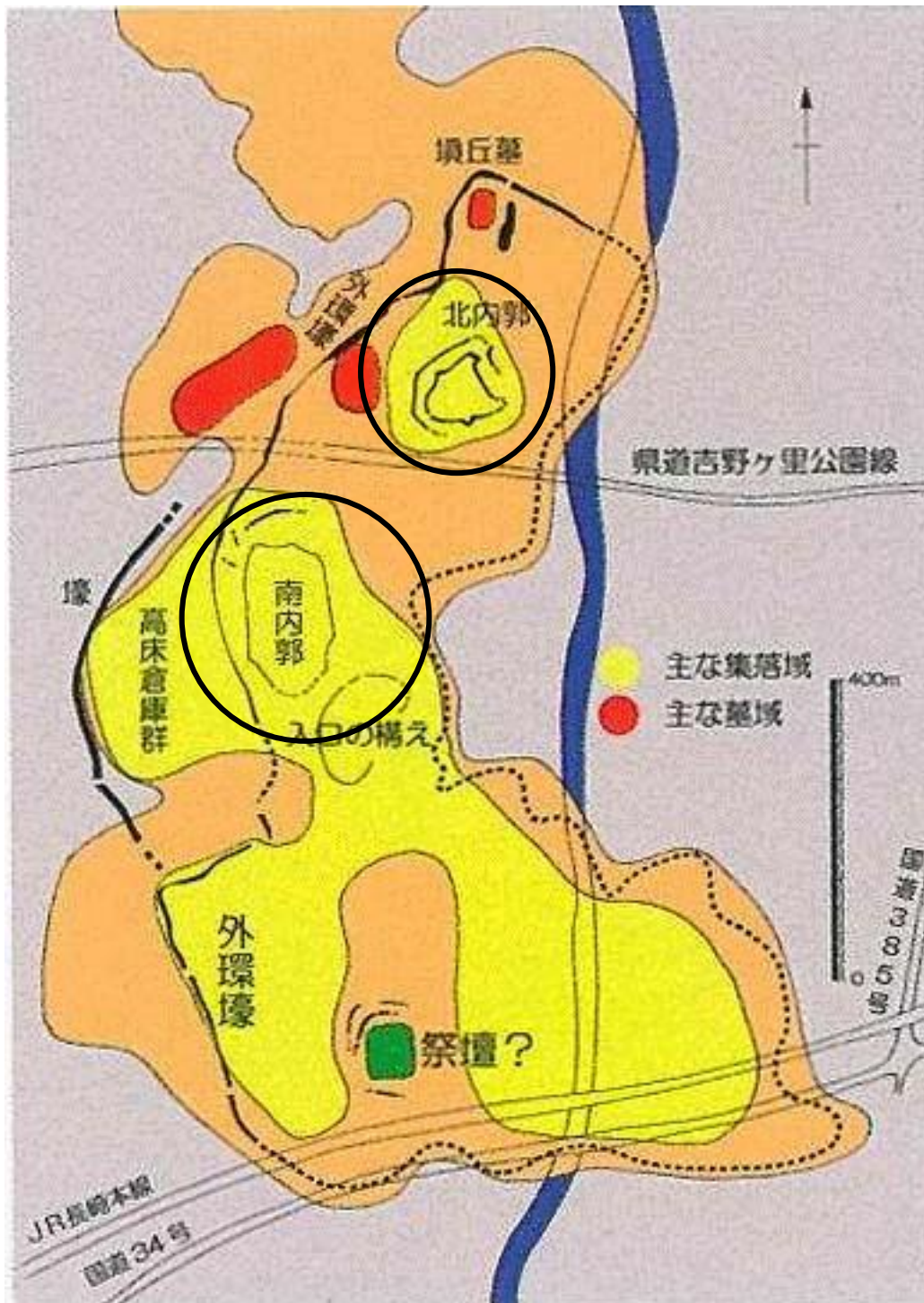
主祭殿 2階

吉野ヶ里のクニ全体の重要な祀りが開かれており、吉野ヶ里の王やリーダーたち、さらには周辺のムラの長が集まっています。

主祭殿 3階

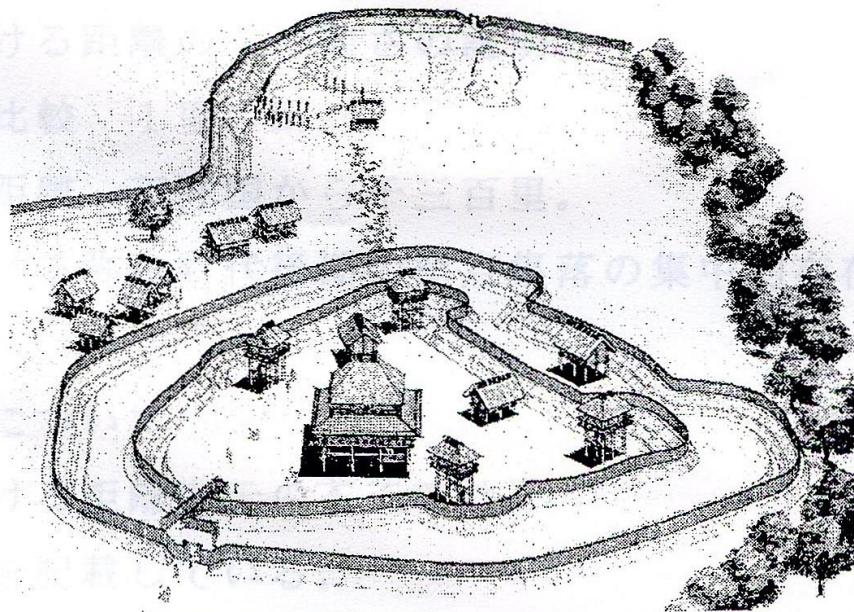
祖先の霊のお告げを聞く祈りを行っています。この結果は従者によって2階で会議を行っている王やリーダーたちに伝えられます。





さらには、上図のとおり、「北内郭」の南方に、「南内郭」(約 11,000 m²)がある。

これまた特別の区画で、内部には竪穴住居群が存在し、高位の人々の居住区とみられている。西方に配置された高床倉庫群は、吉野ヶ里集落のみならず王国全体の物資を保管した倉庫とみられている。



吉野ヶ里北内郭
(弥生時代後期) 建設省「建物等復元検討調査報告書」より引用

弥生時代後期終末期 (2~3世紀)

しかしながら、吉野ヶ里遺跡の「北内郭」の主祭殿 3 階は、最高権力者の私的な居住区画というよりも、祭祀などを行うための公的な執務区画のようにみえる。

最高権力者を含め、重臣たちの居住区画は「南内郭」にあり、それぞれの序列に応じた場所に序列に応じた規模の竪穴住居が与えられ、家族とともに居住していたにちがいない。

しかしながら、おなじ集落内に居住するかぎり、最高権力者は人の目にさらされる。城柵などで目隠したところで、当時の技術では完全に遮断することは不可能である。

よって、【卑弥呼+千人の女性集団】は一般の集落から隔絶された別場所に居住していた可能性が高い。

「王となりてより以来、見(けん)有る者少し」という『魏志倭人伝』の記事は、無視すべからざるきわめて重要な意味を伝えているというべきである。

一般住民との隔絶可能性を加味した判定結果

これまで卑弥呼の所在地について、①卑弥呼と直接結びつく遺物によって判断すべしとしていたが、それに加えて、②一般住民との隔絶可能性という基準で判断すべきことになる。

よって、前号までたどった御笠郡・夜須郡・朝倉郡・日田郡の候補地について、そういう観点から評価を行い、一覧表にまとめてみた。

ついでながら、高良山説、筑後山門説、宇佐説についても対象に加えた。

読者におかれても、自分なりの候補地について判定されたらよろしかろう。

残念ながら、ほとんどの候補地は【±0 点】以下になるはずである。

邪馬台国候補地についての判定結果

候補地		説明	判定		
①	御笠郡説	宝満山の麓の旧御笠郡あたりに卑弥呼の宮殿があったとする説	卑弥呼と直接結びつく遺物	×	-2
			一般住民との隔絶可能性	×	
②	夜須説	砥上岳・曾根田からせり出した夜須丘陵あたりとする説	卑弥呼と直接結びつく遺物	×	-1
			一般住民との隔絶可能性	△	
③	甘木朝倉説	一木・小田台地説	卑弥呼と直接結びつく遺物	×	-2
			一般住民との隔絶可能性	×	
③	甘木朝倉説	丸山公園・大平山・秋月説	卑弥呼と直接結びつく遺物	×	±0
			一般住民との隔絶可能性	○	
④	朝倉説	朝倉町の丘陵地帯にあったとする説	卑弥呼と直接結びつく遺物	×	-1
			一般住民との隔絶可能性	△	
⑤	杷木説	杷木町志波とする説	卑弥呼と直接結びつく遺物	×	+1
			一般住民との隔絶可能性	○	
			天照大神を祭る麻氏良布神社	○	
			斉明天皇の朝倉宮	△	
⑥	日田説	豊後国日田郡とする説	卑弥呼と直接結びつく遺物	○	+2
			一般住民との隔絶可能性	○	
⑦	吉野ヶ里説	佐賀県の吉野ヶ里遺跡とする説	卑弥呼と直接結びつく遺物	×	+1
			一般住民との隔絶可能性	△	
			魏志倭人伝の風景	○	
			伊都国の南	○	
⑧	高良山説	久留米市の高良大社あたりとする説	卑弥呼と直接結びつく遺物	×	±0
			一般住民と隔絶可能性	○	
⑨	筑後山門説	みやま市の山門とする説	卑弥呼と直接結びつく遺物	×	±0
			一般住民との隔絶可能性	○	
⑩	宇佐説	豊前国(大分県)の宇佐とする説	卑弥呼と直接結びつく遺物	×	±0
			一般住民との隔絶可能性	○	

※ ×を-1点、○を+1点、△を0点で採点

これらの判断基準ならびに判定点については、もちろん改善すべき点が多く、あくまで現時点における暫定的なものと理解されたい。

とりわけ、一般住民との隔絶可能性の判断については、現地判断が必須であるが、人によって大きく見解が異なることが予想されるため、主観性を防止するための何らかの工夫が必要と感じている。

暫定1位は日田

前号でも述べたとおり、日田説が暫定1位となっている。

日田出土とされる金銀錯嵌珠龍文鉄鏡(きんぎんさくがんしゅりゅうもんでつきょう)によってこのような結果となったが、これまた前号で述べたように、梅原論文に瑕疵があったとする明白な理由が生じた場合や新たな発掘によって別場所が邪馬台国の有力候補に浮上した場合などにおいては、この暫定的な順位が動くのは当然のことである。

また、この金銀錯嵌珠龍紋鉄鏡が①卑弥呼が授与された鏡なのか、②台与が授与された鏡なのか、③邪馬台国から信認を受けた人物、例えば久津媛の鏡なのかという問題は依然として残るものの、いずれにしる魏の曹操の墓——曹操高陵から出土した鉄鏡と姉妹鏡であり、魏から邪馬台国へ贈呈された鏡であることはまちがいない。

第2位は杷木説と吉野ケ里説である。

ただし、帯方郡の使者たちは、不弥国(宇美)から夜須・朝倉方面に向かったようにおもわれることから、西方に位置する吉野ケ里説はこの点でかなり不利となるが、ほかの要素を加味して、一応そのままの順位としている。

杷木町は、北側は朝倉の麻氏良山などの山々と丘陵地に囲まれ、南側には筑後川が流れ、天然の要塞ともいえる閉鎖された地勢である。

麻氏良山には麻氏良布神社が祭られ、天照大神が主祭神として祭られている。天照大神＝卑弥呼とみる立場から1点加点したが、この点については異論がありえよう。

なお、この地には神功皇后が訪れたという伝承も残され、西側の朝倉町との境界には恵蘇八幡宮が祭られ、斉明天皇ゆかりの場所として朝倉橋広庭宮木の丸殿の石碑も建てられ、神社裏手の円墳2基のうち1基はこの地で没した斉明天皇の御陵とする伝承も残されている。

すでに紹介したように、九州横断道路関係の発掘調査結果から、同じ規格で建設された掘立建物跡が確認され、斉明天皇とともにこの地を訪れた兵士たちの兵舎である可能性が高まっている。

これまた紹介したとおり、九州歴史資料館の小田和利氏の考証などにより、朝倉橋広庭宮に関して「志波説」が有力になっている。

このように、閉鎖的な地勢に加え、天照大神を祭る麻氏良布神社の存在や斉明天皇の朝倉宮などを考慮して、吉野ケ里説と並んで第2位となった。しかも日田にも近い。

いずれにしる、杷木説が甘木朝倉説より上位の第2位となったことは、きわめて重要である。

以上の判定結果をもとに、やや空想をまじえて総括すれば、次のようにいえるかもしれない。

「卑弥呼は千人の女性たちと杷木の地で暮らし、後継者の台与は日田を拠点に邪馬台国の新たな発展をめざした」

しかしながら、邪馬台国論は空想ではない。

身を引き締めて、ひとつずつ積み上げて、前に進むしかない。

御笠郡	兵卒・住民	備考
夜須	兵卒・住民	奴国対策
甘木	一木・小田台地	兵卒・重臣・住民
	秋月・大平山・丸山公園	卑弥呼ほか侍女千人等
朝倉	兵卒・重臣・住民	
杷木	卑弥呼ほか侍女千人等	卑弥呼の拠点
日田	卑弥呼・台与・久津媛	台与の拠点

邪馬台国に関する県別のグラフ

邪馬台国に関しては、安本美典氏という巨大な先人が半世紀以上にわたり、この分野を切り開いてこられた。

筆者も、安本美典氏編集の『季刊邪馬台国』(梓書院)を通じて古代史の分野に誘われた一人である。

2008年(平成20)12月の『季刊邪馬台国』100号に掲載された「『季刊邪馬台国』100号への軌跡」は、いまでも懐かしく思い出す筆者の記念論文である。

そのなかで、次のようなことを書いた。

安本美典氏は、『季刊邪馬台国』のなかで、「鉄鏃」「鉄刀」「鉄劍」「鉄矛」「鉄戈」「刀子」「絹」「勾玉」などの北部九州における圧倒的出土状況と奈良県からの微々たる出土状況からみて、邪馬台国は北部九州にあったと繰り返し述べられる。鏡についても、魏の時代の「位至三公鏡」や「蝙蝠鈕座内行花文鏡」も福岡県を中心に出土しており、奈良県からは一面も出土せず、「十種の魏晋鏡」についても、福岡県からの出土は奈良県の二十倍に近いと述べられる。

このような単純明快な客観的事実の積み重ねによる立論とともに、文献学、統計学、言語学、人類学など、さまざまな分野からのアプローチを試みておられる。

いまでもこの気持ちに変わりはない。「小学生でもわかる論理」「数字はうそをつかない」「真実はシンプル」「シンプル・イズ・ベスト」——なのである。

安本美典氏の著作をあまりお読みになっていない方のために、『「邪馬台国畿内説」徹底批判』(勉誠出版・2008)など、安本美典氏の著作にしばしば掲載されている**県別のグラフ**をこの場で掲載させていただきます。

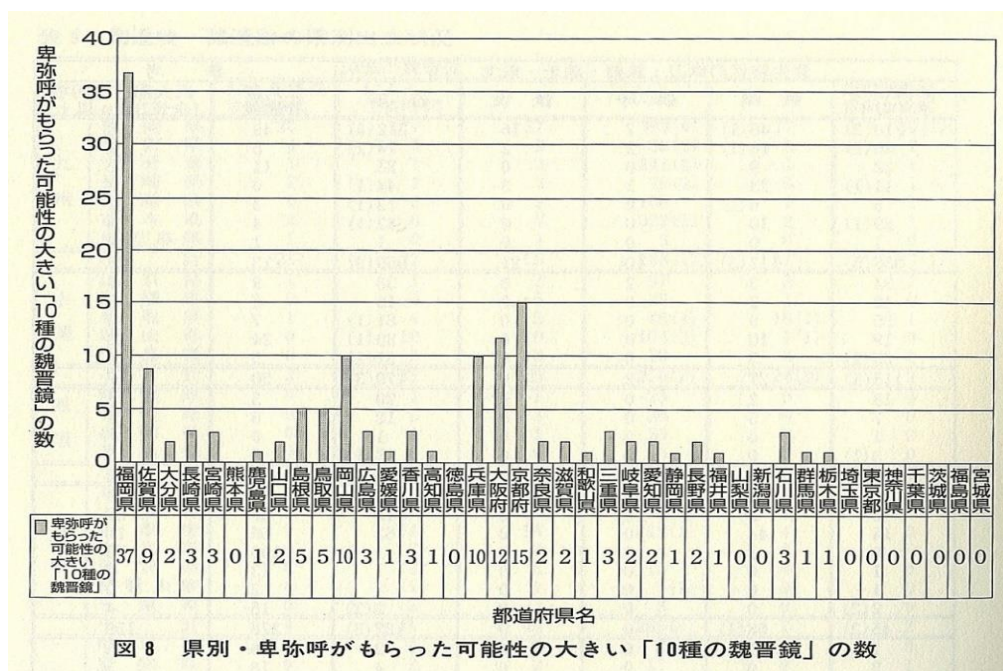


図8 県別・卑弥呼がもらった可能性の大きい「10種の魏晋鏡」の数

- (10) 凹圈鳥文鏡
- (9) 飛禽鏡
- (8) 三角縁盤竜鏡を除く盤竜鏡
- (7) 獸首鏡
- (6) 夔鳳鏡
- (5) 漢鏡6期の方格規矩鏡
- (4) 方格規矩鳥文鏡
- (3) 双頭竜鳳文鏡
- (2) 位至三公鏡
- (1) 蝙蝠鈕座内行花文鏡

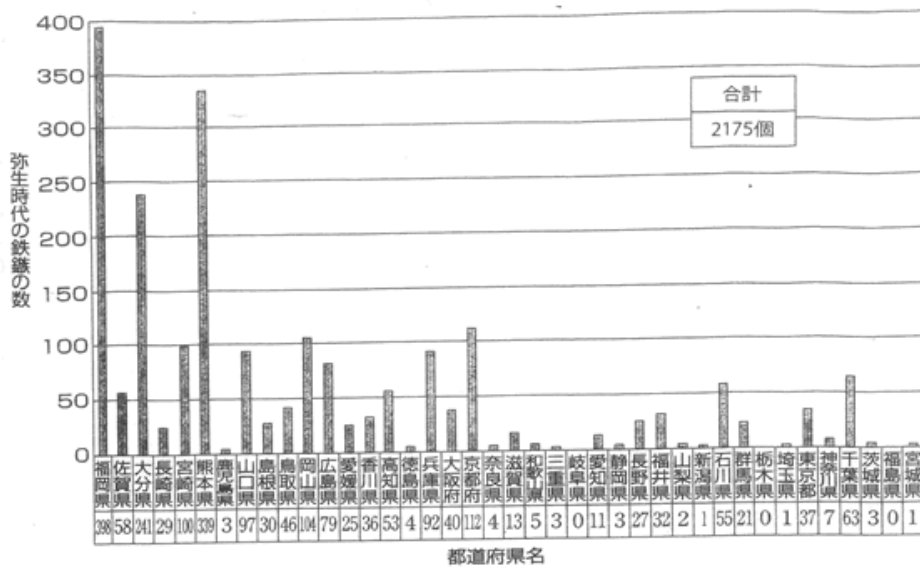


図 県別 弥生時代の鉄鏡の数

(もとのデータは、川越哲志編『弥生時代鉄器総覧』[広島大学文学部考古学研究室、2000年刊]による。)

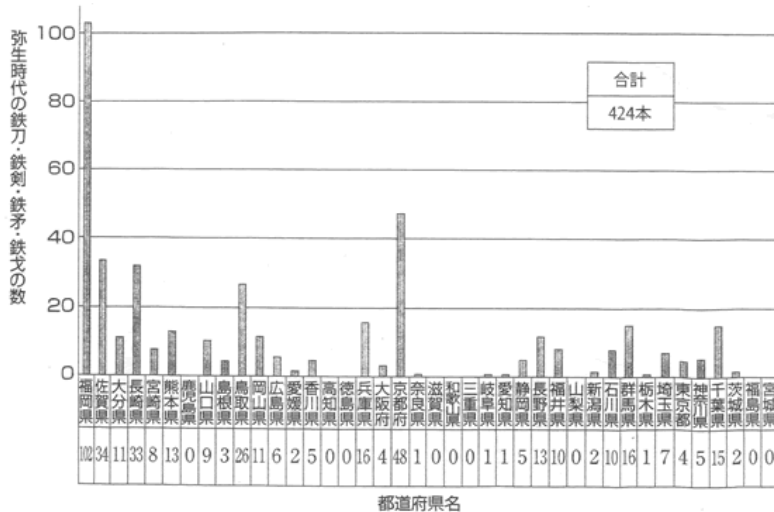


図 県別 弥生時代の鉄刀・鉄剣・鉄矛・鉄戈の数

(もとのデータは、川越哲志編『弥生時代鉄器総覧』[広島大学文学部考古学研究室、2000年刊]による。)

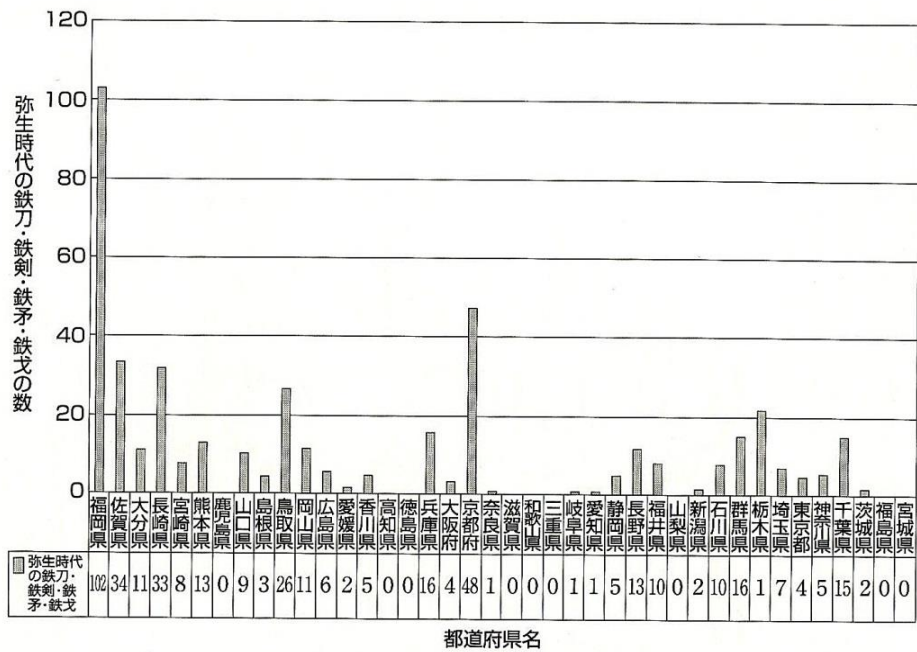


図2 県別・弥生時代の鉄刀・鉄剣・鉄矛・鉄戈の数

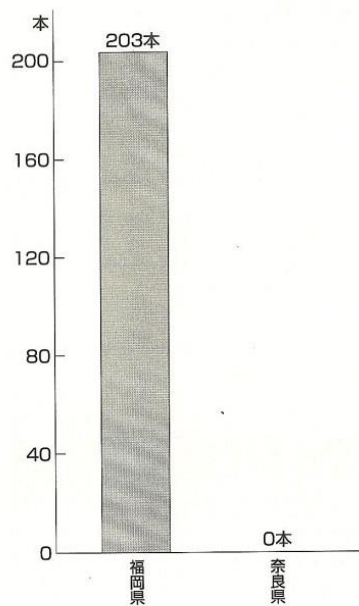


図3 広形銅矛・中広形銅矛・中広形銅戈 (邪馬台国時代に近い時代の銅矛・銅戈) の出土本数 (『考古遺跡・遺物地名表』柏書房、1983年刊による。)

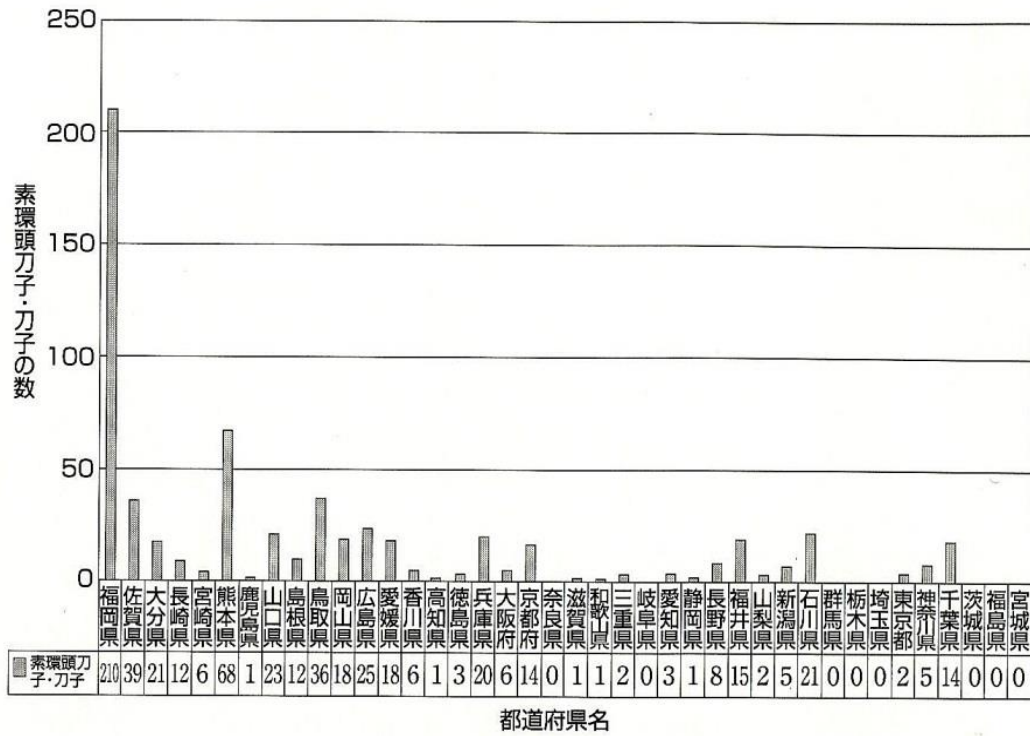


図4 県別・素環頭刀子・刀子の数

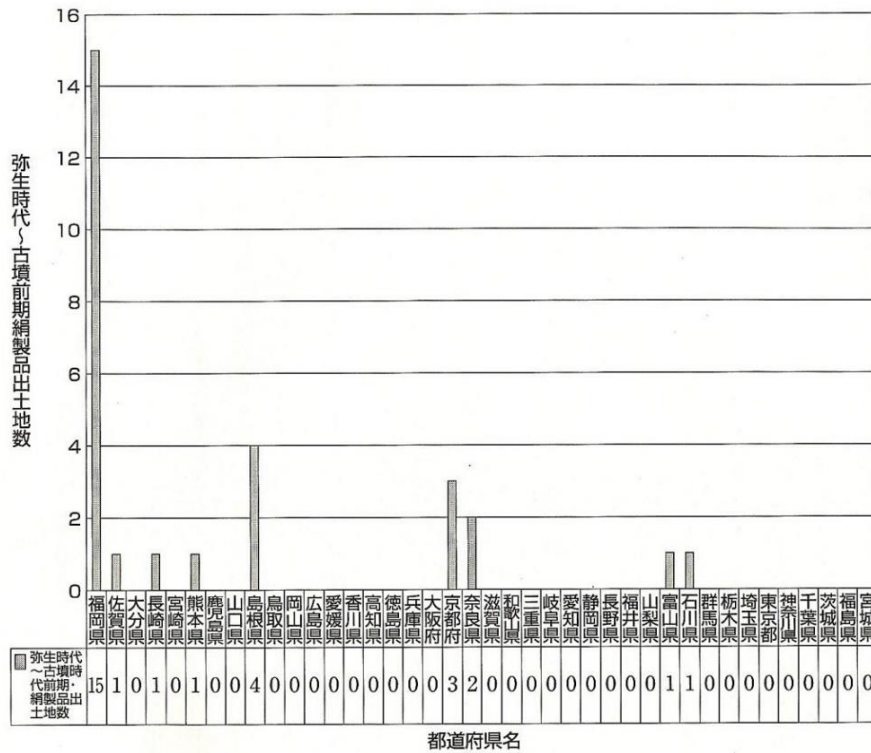


図5 県別・弥生時代～古墳時代前期絹製品出土地数

○「近畿説」に有利なのは「三角縁神獸鏡」と「前方後円墳」のみ

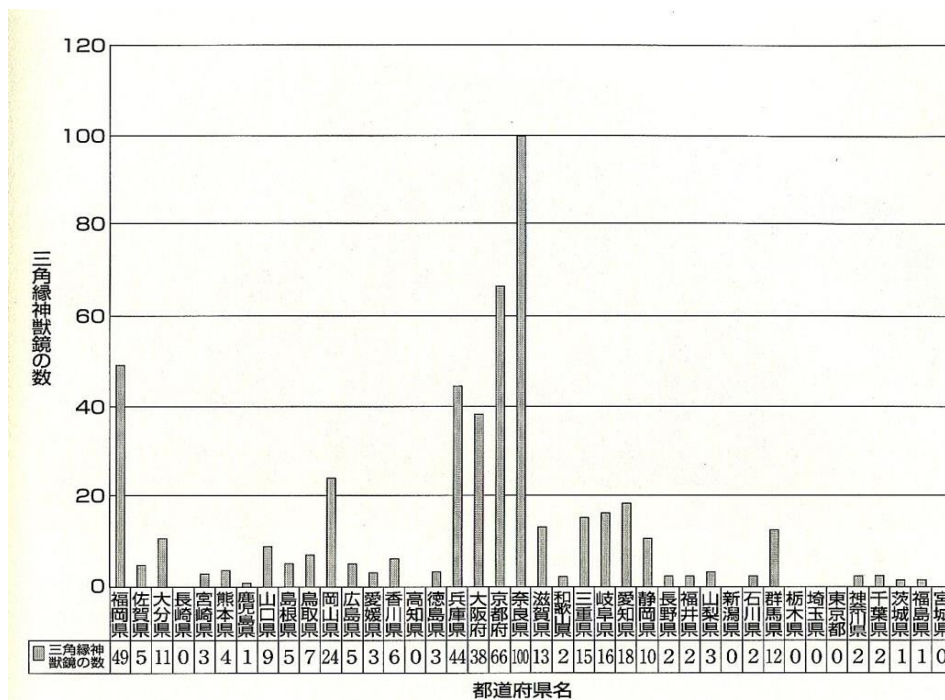


図10 県別・三角縁神獸鏡の数

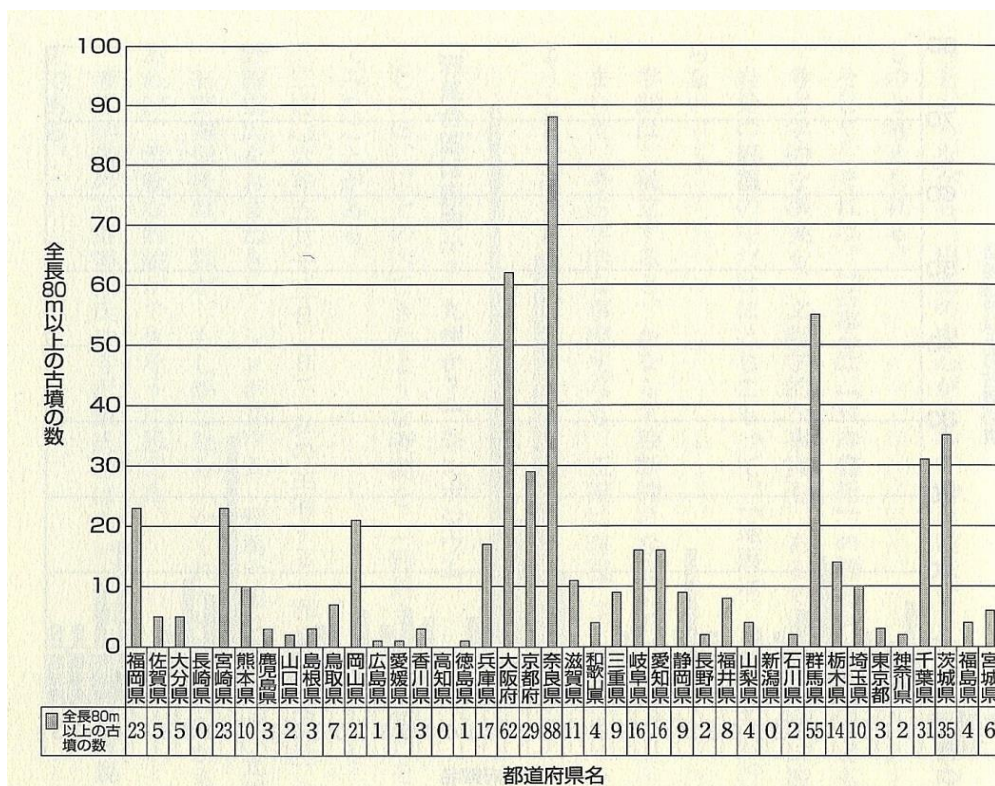


図11 県別・巨大前方後円墳（全長80m以上）数

表 5 福岡県と奈良県の比較

	諸遺物		福岡県	奈良県
	県			
『魏志倭人伝』 (大略西暦三〇〇年以前、弥生時代の遺物)	弥生時代の鉄鍬		398個	4個
	鉄 刀		17本	0本
	素環頭大刀・素環頭鉄剣		16本	0本
	鉄 剣		46本	1本
	鉄 矛		7本	0本
	鉄 戈		16本	0本
	素環頭刀子・刀子		210個	0個
	邪馬台国時代に近いころの銅矛・銅戈 (広形銅矛・中広形銅矛・中広形銅戈)		203本	0本
	絹製品出土地		15地点	2地点
	10種の魏晋鏡		37面	2面
	庄内期出土の鏡	小山田 ^{こやまだ} 宏一氏のデータによる		45面
樋口隆康氏のデータによる		5面	0面	
奥野正男氏のデータによる		3面	0面	
ガラス製勾玉・翡翠製勾玉		29個	3個	
古墳時代の遺物 (大略西暦三〇〇年以後)	三角縁神獣鏡		49面	100面
	前方後円墳 (80m 以上)		23基	88基
	前方後円墳 (100m 以上)		6基	72基

(くわしい県別データなどは、以下にのべられている。)

どうであろうか。

以上のグラフをみれば、あらゆる指標で断トツの福岡県に邪馬台国があったことは一目瞭然である。

小学生でもわかる。

しかしながら、こうもいえる。

「このグラフだけでは、福岡県のどこに邪馬台国があったかわからない」

「そして、佐賀県・大分県・長崎県など九州各県と邪馬台国がどのような関係であったのかわからない」

これが、この連載で取り組んでいる大きなテーマの一つである。

(以下、つづく)